

2021年横浜ナザレン教会・受難節第二主日礼拝

「御手に委ねて自由に生きる」

ルカ福音書第20章45節から第21章4節

【聖書】

ルカによる福音書20:45 民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた。46「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。47そして、やもめの家を食べ物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

21:1 イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。2そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、3言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。4あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

1. 「確かに言うておく」

受難節第二主日の朝、今日与えられました聖書も、エルサレムでの主イエスの最後の日々を追っています。その主イエスの姿は、孤独です。確かに、この時点で弟子達の他に多くの民衆が主の側にいました。ですが、主の思いを理解できる者は一人もいません。多くの人に囲まれているにも拘らず、主は深い孤独を抱えておられたと思います。

しかし、私は今日のテキストを繰り返し読んでいて、主の寂しさは、ここで随分と和らいだのではないか？と思うようになりました。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。」この「確かに言うておく」の「確かに」という単語は、「真理」を表すギリシャ語から来ており、「真実に言うておく」と訳せます。この世で、私達が語る言葉、聞く言葉に、真理の言葉は多くはありませんが、ここで、主イエスは、弟子たちをはじめ民衆に真実な事を仰ろうとしています。それは何なのか？

それは、他ならぬご自身の命、ご自身の在り方ではないだろうか、主イエスは、この寡婦の中に、ご自身の姿を見出しておられるのではないかと思うからです。これから暫くの時、共に主が寡婦の献金に見出した者に、心を集めていきたいと思います。

2. 寡婦の献金

この寡婦の献金は本当に僅かです。ご存じの方も多いでしょうけれど、レ

プトン銅貨とは、当時のギリシャ・ローマ世界で「これより下はない」という最小単位の通貨でした。その価値は、労働者の日当の128分の1。2021年の日本で言えば、50円硬貨ほどでしょうか。レプトン銅貨二枚でも、100円。

当時のエルサレム神殿には、女性でも入れる庭「婦人の庭」がありました。そこにラッパ型をした献金箱が用途別に13個置いてあったようです。神殿に来た人々は、献金係に自分の献金額と用途を伝えます。すると、係の人が、献金額を声に出して確認し、それから献金をささげたとのこと。だから、同じ庭にいる全ての人が、誰がどれくらい献金しているか知ることができたようです。エルサレム神殿の庭に、得意げな金持ち達がささげた多額の金額を告げる声が続きます。そんな中、「二レプトン」という僅かな献げものに、心に留める人もいません。しかし、人を見向きもしない少額の献金に、主イエスは目を留められるのです。何故でしょうか？いったい主が喜ばれる献金とはどのような献金で、どうしたらそのような献げものをする事ができるのでしょうか。

よく言われる事は、主イエスは、献金の価値は、金額にはない、その献金にどれだけ心を籠める事ができたか？が大切である、量より質だという事を弟子たちに教えようとされた、ということです。では、その献金の質とは何なののでしょうか、心を籠めるとはどういう事なののでしょうか。

ある人は、「どれだけ献金する事に犠牲を払っているか、痛みを感じているか」が献金の質だといいます。貧しい者が献げものをする事は、金持ちがするよりも大きな犠牲を払う事です。ですから、辛い分だけ心がこもっており、それだけ質が高い献金、価値がある献金だというものです。それも一つの考え方だと思います。しかし、献金する事により痛みを感じる事が大切とは、本当なののでしょうか。私達が痛みを感じる事を、主は喜ばれるのでしょうか？

この寡婦が、残す所なく生活費の全部をささげたから主イエスは喜ばれた、と説く人もいます。しかし、生活費の全部を捧げて、実際、その後の生活はどうするのでしょうか？自分一人ならともかく、小さい子ども等がいる場合はどうでしょう。神にささげて子供を飢えさせて、それを主イエスが喜ばれるのでしょうか。この寡婦も、たまたま、この日は、生活費全部である二レプトンを献げる事ができたかもしれませんが、明日も明後日もそれを続けて、どうして生きていくことができるのでしょうか。

どうもすっきりしません。献金について考える事は難しい。教会生活の中で、躓きやすいものの一つが献金だと言われています。誰もが一度は、献金について戸惑うものではないかと思います。場合によっては献金が原因で教

会に来なくなる人もいます。

ナザレン教団では、かつて、収入の十分の一献金を信徒の義務のようにしていた時代があります。昔ほどではありませんが、今でも、社会人は、収入の十分の一を献金として献げることが推奨されています。そして、そんな教会の伝統に躓く人は多くいます。

そこでの私たちの躓きの原因は、献金を町内会や同窓会等の会費と同じに考えてしまう事ではないかと思います。会費だから納めねばならないし、多く収める人に発言権がある、となる。しかし、この世の集まりの会費と、教会の献金は、その成り立ちが全く異なります。献金の基礎には、「私達が持っているものは、全て天の父なる神さまから頂いたもの」という考え方があるからです。「いや、そんな事はない。私が一生懸命働いて得たお金だし財産だ、神のものなんてとんでもない、私のものだ」と反論したくなる人もいでしょう。それがこの世の常識ですし、私もかつてはそう考えていました。ですが、それは自分の傲慢であったと気づかされました。お金を得る為に努力できる力も環境も、健康も、自分一人の力で得たものは、一つもないのだと気づかされたのです。親が丈夫に産み育ててくれた、とか、周囲の人に助けられた、とか、生まれながらの才能とか性格とか、また、よい人達と巡り会えたとか、たくさん要因があって、今の自分がいるのだと思います。使徒パウロは、自分達を優れた者だと自惚れて貧しい教会員を見下しているコリント教会の有力信徒達に、次のように書き送りました。「いったいあなたの持っているもので、頂かなかったものがあるでしょうか。もし頂いたのなら、なぜ頂かなかったような顔をして高ぶるのですか。」(Iコリント4:7)

本当にそうだと思います。私達が持っているもので、自分のものと言えるようなものはなく、寧ろ全て神からのものと考えた方が自然で理にかなっていることに気づかされます。それが心から判って、私達は神に感謝し、神から自分に与えられたものの一部を神にお返しする。感謝と賛美の心を込めて神にお返しする、ささげものをする、その一つが献金です。だから、神から豊かに与えられたものをどれほどお返しするか、献げるかは、一人一人に委ねられています。一人一人が、天の御神と向き合い、祈りつつ決めるもの。「あの人は多く献金しているから素晴らしい」とか「あの人は少額だから信仰が薄い」とかは言えないのです。

3. 寡婦の自由

この寡婦も、天の御神と向き合い、持っているものを全てお返ししました。やろうと思って出来る事ではありません。私達、この世で生活していかなば

ならないのですから。もし、この寡婦のようにしなければ、父なる神さま、主イエス・キリストに喜んでいただけないのだ、と聖書が語っているとしたら、私達、誰も神さまに喜んで頂く献げものを誰もできなくなります。私達はいったい、この寡婦の献金をどう考えればいいのでしょうか。

一つ、思う事は、おそらく、彼女には、「今自分は生活費全部を捧げているんだ」というような意識は全くなかったのではないかと思います。もし彼女に、生活費を惜しむ気持ちや将来への不安があるのに、自分の貧しさに対する劣等感から思わず二レプトンを献げるような事をしたりしたのなら、又、それとは逆に、「いっぱい残している金持ち達とは違って、私はすべてを捧げたるのだ！」と己を誇りたくて、彼女がささげていたとしたら、主イエスが「真実に言うておく」と寡婦を指し示す事はなかったでしょう。もし彼女が貧しさに卑屈になったりしていれば、主イエスは、彼女の苦しみに寄り添われ慰められたでしょうし、また、誇り高ぶっていれば、その高慢を打ち砕く事もされたでしょう、そうして彼女を助けてくださったと思います。が、「真実に語る」と仰って弟子達に喜びをもって彼女を指し示す事はなかったでしょう。ですから、彼女は、真実に、生活費全部を捧げているという事さえ全く気にしていなかったのだと思います。そういうことさえ気にならない、貧しさへの恥ずかしさで卑屈になる事からも、残らず献金したと誇り高ぶりや胸を張る事からも、彼女は自由でした。だから、主がとても喜んでおられます。

4. 律法学者の不自由

この寡婦の自由を考えるのに、参考になるのが、寡婦と全く逆の律法学者達ではないかと思います。律法学者達は、律法を学び、ユダヤの人々の実際の生活の中でどう実践していくかを研究し、人々にアドバイスしていた学者です。律法がユダヤ社会の中心であったため、彼らは人々を導く指導者として非常に尊敬されていました。主イエスが、「律法学者達は長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」と批判されている言葉からも、彼らがどれほどユダヤ社会で名誉ある地位を占めていたかがうかがえます。「長い衣」とあるのは、律法学者達が着ていた上衣であり、誰もが憧れ尊敬せずにはいられないものだったようです。広場とは、市場という意味もあり、裁判なども行われていた公の場所。そこで、多くの人が我先にと長い衣を着た律法学者達に挨拶をしていたのでしょう。彼らは、現代の裁判所と議会を合わせたような最高法院の一員でもありました。律法学者達は社会に多大な影響力を持つ人々。そんな有力者の周りに人が集まり我さきに挨拶する光景は、現代でも

見られます。

しかし、その人々からの尊敬を、社会での地位を、律法学者達はどのようにやって得たのでしょうか？神から頂いたのです。律法学者達は聖書を研究し、神の戒めについて学び実践し、祈り考え、神から様々な知恵を頂き、それを民衆に伝えました。人々は、律法学者を通じて示される神の言葉に大いに驚き、喜びました。だから、彼らを賞賛し、もてはやしたのです。律法学者こそ、日々神と向き合い、それを誰よりも知っていた筈なのです。神の御力の大きさ、神の知恵の深さを人々は喜んでいと分かっていた筈です。ですが、人とは愚かな存在です。彼らは、勘違いして自分自身を誇るようになりました。神の力によって得た賞賛が彼らを陥れる罠となりました。人からの尊敬や称賛をえる事が第一の目的となってしまう、やがて、神を求めることがなくなり、神を、そして神に憐れまれてある自分を見失ってしまいました。だから、無意識に夫を亡くした女の弱い立場につけこむ事さえする者も出てきました。いかにも信仰深いふりをして、人々にほめてもらう事が目的で見せかけの美辞麗句の長い祈りは日常茶飯事となっていたのだと思います。そんな彼らは常に人の目を気にして生きています。なんと不自由な在り方でしょうか。しかし、この律法学者達の不自由さは、私達の中にも確かにあるのだと思います。

5. 寡婦の献身

それに比べて、寡婦は実に自由です。彼女は、生活費全部をささげるかどうか、意識する事なく、誇ることなく、自由にささげています。神のみ前に自由です。彼女の自由とは、どこからきているのでしょうか。

主イエスの言葉から見ていこうと思います。「あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」この「生活費」と訳されている言葉は、「ビオス」というギリシャ語で「命」「生命」と訳してもいい言葉です。生命科学の事を英語で「バイオテクノロジー」と言いますが、その「バイオ」「bio-」という接頭詞の語源でもある言葉です。実際、文語訳聖書では、ここは、「生命の料（しろ）」と訳されています。「この寡婦はその乏しき中より己が有る生命の料（しろ）をことごとく投げ入れたればなり」。「投げ入れた」とあります。どこへ投げ入れたのでしょうか。「生ける神のみ手の中に」です。神のみ手に自分の命を投げ入れた、委ねたのです。主イエスはこう仰っているようです。「この寡婦は、自分の命全部を、存在全体を神の御手の中にささげたのだ」と、喜びをもって語っておられます。

この寡婦が、実に自由で解放されているのは、神の御前に自分自身を全て

捧げているからなのです。彼女は、「金」だけを捧げたのではない、自分自身をささげています。生活費の全部だ、何割だとか、関係ありません、生活費どころか、神から頂いた自分自身全体を、神にお返ししているのですから。「私達は、生きるにも死ぬにもキリストのもの」と言ったのは、使徒パウロですが、その使徒パウロと同じ信仰を先取りして彼女は生きています。少しも残さず、自分をからっぽにして、天のみ父の手に委ね切っているのです。何一つ、自分の手で握りしめていない、だから何かを失うのではないかと気にして不自由になる事などありません。全部必要なものは、天の父なる御神が与えてくださる、思い煩いから解放された、実に単純な幼子の信仰に生きています。彼女の姿から判るのは、私達は、自分自身を神に献げてこそ、自分から解き放たれるのだと言う事です。自分自身を捧げてこそ、神の自由に生きる事ができるという事ではないかと思えます。

一方、律法学者達は、違いました。彼らは、神の栄光を神に返さずに自分のものとして、握り締めてしまったのです。それが彼らの中で膨れ上がり、彼らを傲慢にしてしまい、神から遠ざけました。傲慢な者は誰でも神から遠くにいるのだと思えます。そして、遂には、民衆の尊敬を自分たちから奪った主イエスに怒り、策略を用いて殺すのです。最も神の事を考えていた筈の神の民の指導者が、神を殺す、遠い2000年前の話しではありません。現代の教会にも、牧師にも、信徒にも言えること、特に牧師や神父、教会で重荷を担う人、自分は神から多く受けていると思う者は、それを強く思えば思うほど、この主イエスの言葉の前に謙るようにと招かれています。

6. 主イエスの献身

何故なら、神の恵みによって得たものを自分のもののように誇る彼らの為に、私達の為に、主イエスは十字架に架かれたから。ルカによる福音書での主イエスの十字架上の最後の言葉は、主イエスの姿勢をよく表しています「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」。神から頂いたものを「自分のものだ、誰にも渡さない」と手を固く握り締め、自分という牢獄に囚われて、不自由な私達。そんな私達が、手を開いて神にすべてを返すことができる為に、いえ、そればかりでなく、自分自身を天の父なる御神の御手に委ねることができる為に、まず、ご自身を、神の峻烈な裁きに委ねたのです。神のものを自分のものとして誇る私達のうちに完全なる正義である神の裁きに耐えうる者はいません。主イエスが、裁きに耐えない私達の代わりにこの裁きを受けてくださり、そして三日目に甦ってくださって罪が赦されているからこそ、私達は、親の胸で眠る幼子のように安心して、自分自身を神の御手に

投げ入れることができるのです。

このように主イエスこそ、自分自身を神にささげ尽くしたお方です。主が、今日の寡婦の姿をことのほか喜んでおられたのは、この寡婦の姿に、十字架へとすべてを差し出すご自身の姿を見出したからかもしれません。勿論、主の十字架の犠牲と今日の寡婦の献金を簡単に比べることはできません。しかし、自分自身を神のみ手に委ねる、という点では一致しています。主イエスは、この寡婦にご自身の友の姿を見出された、真の神の民の姿を見出し、そして、慰められました。だから、真実に喜ばれたのです。ある神学者は、このことを次のように語ります。「エルサレムにお入りになってから、ほんとうの意味で主イエスが出会われた人は、この寡婦一人であった」。その通りだと思います。「主イエスが出会った」と言っても、この寡婦が主イエスと顔見知りになった、いうわけではありません。十字架と復活の主イエスのあり方を、この寡婦は、自身の深い所で共にしていた、という事を主が気づいてくださった、と言う事だと思います。主イエスの「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」という最後の言葉を共に生きていたのは、弟子達ではなく、この寡婦でありました。

私達は、今から献げものをします。既に御子イエス・キリストの十字架の故に私達の罪は赦されています。安心して自分自身をささげ、自分自身を空っぽにし、霊なる御神、聖霊で満たして頂きたい、そうして、名誉や富や財産など、この世のことに囚われない神の子の自由に生きて、イエス・キリストを宣べ伝える喜びに生きたいと切に願います。